1	SE	場面切り替え
2	SE	足音/石床
3	みちる	「あれは――おじ、弥彦先生」
4	弥彦	「織部さんに一ノ瀬さん。今日も元気そうで何よりです」
5	みちる	「もう。子供じゃないんだけどな」
6	弥彦	「二人ともちょうどいいところに来てくれました」
7	みちる	「ちょうどいいところ？」
8	弥彦	「はい。二人にこれからについての話をしようと思っていたところでしたので」
9	一ノ瀬	「二人？　僕だけじゃなくてですか？　あ、いやみちるが一緒に聞いてくれていても全然かまわないんですけど」
10	一ノ瀬	今僕のことを一ノ瀬って――
11	弥彦	「そうですね。場所を移しましょうか、ここは少し冷えますから」
12	SE	場面切り替え
13	SE	カップを置く
14	弥彦	「発酵させたチャノの葉を煮出したお茶です。どうぞ」
15	みちる	「こんな貴重な葉、勝手に使っていいの？　これトリウィウムのお客様用のなんじゃ」
16	弥彦	「今日は他に誰もいませんからね。一ノ瀬さんも内緒にしておいてもらえると助かります」

17　一ノ瀬　「は、はい。ありがとう、ございます。いただきます」

18　SE　//一拍置く（お茶啜る系入れるかも）

19　一ノ瀬　ん？　これ、紅茶だ

20　みちる　「はぁ～。おいしい。普段ケチケチ薄めて飲んでいるのとは全然違うかな」

21　みちる　「そうだタク、ごめんね。私、先に謝っておかなくちゃ」

22　SE　カップを置く

23　一ノ瀬　「ん？　どうして？」

24　みちる　「タクと話してみて面白かったし、トリウィウムのことを知って欲しいって思ったのは本当だよ」

25　みちる　「だけど――本当は最初、弥彦先生からタクに色々聞くように言われてたんだ」

26　みちる　「理由はどうあれ騙していたみたいになっちゃったし、あまり良い気はしないと思うけれど――でもタクと話せて楽しかったのは本当だから。だから最初に伝えさせて」

27　みちる　「謝ったからって許されるわけじゃないのは分かっているけれど……。ごめんなさい」

28　一ノ瀬　「気にしてないよ。自分でも十分怪しいやつだと思うし。僕自身あそこからどうしたらいいのか分からなかったから凄く助かった。それに――」

29　一ノ瀬　「僕も楽しかったから」

30　みちる　「タク……」

31　弥彦　「すみません。トリウィウムの案内も含めて、本来なら私からするべき話ではあったんですが。織部さんにもちょうど良い機会だと思ったんです」

32　一ノ瀬　「みちるにも？」

33　弥彦　「織部さんは私の姪で、あまり大きな声で言うことでもありませんが、その親権も預かっています。監督者、といえばわかりやすいでしょうか」

34　弥彦　「だから織部さんには一ノ瀬さんとなるべく親しくなって欲しい、と。もちろん一ノ瀬さんや織部さんの自由意思のもと、ではありますが」

35　一ノ瀬　「そう、なんですか。でも先生がみちるの、その……ご両親代わりというのは分かりますが、どうして僕を？　自分で言うのもなんですが、そんなに大切な存在なら得体の知れない人間に近づけさせたくないんじゃないかって思って」

36　弥彦　「同じだったからです」

37　一ノ瀬　「同じ？」

38　弥彦　「はい。みちるが私の前に現れた時と、昨夜一ノ瀬さんがトリウィウムの前に佇んでいたこと。そのどちらもがまるで繰り返しを見ているかのように同じでした」

39　一ノ瀬　「それって……どういう……」

40　SE　物音/がさごそ系

41　一ノ瀬　あれは、さっきの教科書……？

42　弥彦　「織部さんから聞いているかもしれませんが、これは私が専攻している分野に関する教科書です」

43　一ノ瀬　「世界史……いや、歴史ですか？」

44　弥彦　「はい。しかし単に歴史という括りだけでは少し語弊がありますが」

45　弥彦　「一ノ瀬さん。一ノ瀬さんの学校では、教科書を家族で使い回したりすることはありますか？」

46　一ノ瀬　「……いえ。けど事情によっては全く無いことも無い、と思います」

47　弥彦　「同じようにトリウィウムでもほとんどありません。
どの教科も使われる教科書は大体数年周期で改訂が入りますが、
大きな改訂でもない限りそのまま使うこともできなくはありません」

48　弥彦　「ですがそれはあくまで歳の近い兄弟や姉妹程度の年代であれば、
とただし書きが付くと思います。例えば、両親が使っていた教科書を使い続けるといったようなことはしませんよね」

49　弥彦　「しかし、この教科書はこのトリウィウムで五十年ほど使い続けられています」

50　一ノ瀬　「っ？！」

51　弥彦　「これだけではありません。同じような書籍がいくつか同時期に
発見され、そのほとんどがトリウィウムでの研究用に納められています。
歴史や数学、おそらくは語学といった、どれも学問に関するものでした。
――およそ八十年前のことです。」

52　一ノ瀬　「何が、言いたいんですか」

53　弥彦　「失礼。私の担当科目をお伝えします」

54　弥彦　「私の担当科目は「異世界学」。異世界史やその暮らし、私達の預かり知らぬ世界の人々が何を考え、どう活動していたのかを研究、研鑽する学問です」